

「ゆうだい21」の特性と栽培法

宇都宮大学農学部附属農場

種子消毒

◎販売する種子粃については、未消毒です。ばか苗病等の発生を防止するため、種子消毒を徹底してください。

特性 (栽培地：栃木県真岡市における栽培実績です)

◎出穂はコシヒカリより2、3日遅い早生種で、5月中旬の移植では8月10日前後の出穂となる。コシヒカリに比べ以下のような生育・収量面での特徴がある。

稈長は5~10cm高く、1mを超える。穂長は22~25cmで3~5cm程度長い。1穂粃数は130~150粒程度でコシヒカリの90粒前後に対して明らかに多く、大きな草姿と穂に外観上の特徴がある。分けつ性は同様の中間型であり、最高茎数は同程度であるが有効茎歩合がやや低いため、穂数はやや少なくなり、結果的に単位面積当たりの粃数はほぼ同程度になる。

玄米千粒重は22g前後で同程度である。粒形が長粒気味であるために、同じ粒厚選別基準では屑米の発生比率が高い。また登熟歩合も低いためコシヒカリより収量は3~4%ほど低い。耐倒伏性はコシヒカリよりやや強い程度であり、特に強くはない。長稈品種であるため多肥栽培をするとなびき倒伏を招きやすく、挫折型の倒伏発生は少ないが、受光態勢が悪化するために収量低下につながりやすい。

玄米外観品質は近年のような高温条件下でも乳白米等の発生が少なく、品質が低下しにくい特徴がある。また食味は特有の粘りがあり、また甘みと硬さも適度で明らかに優れている。いもち病は葉いもち、穂いもち共にやや強く、穂いもちへの移行が少ない特徴がある。

栽培方法

◎現在コシヒカリの栽培が行われている地域に適応し、播種期、移植期とも同じでよい。本学農場では稚苗育苗(育苗期間20~25日)で播種量は乾粃で100~120g/1箱、18~20箱/10aを目安にしている。肥培管理等はコシヒカリと同様でよいが、栽植密度は18株/m²前後、1株3~4本植とやや疎植が適している。施肥量はコシヒカリと同程度でよい。減化学肥料、減農薬栽培等の特別栽培に適応性が高く、いもち病無防除でも穂いもち病の発生は少ない。水管理は慣行でよいが、コシヒカリほど強い中干しをする必要はなく、間断灌漑程度でよい。